



## 桂枝茯苓丸

これについての条文はもうひとつよくわからないんです。金匱要略はもう少し長い条文なのですが、簡略化して説明します。「婦人宿ヨリ癥病（血のめぐりが悪いことで、血栓・血塊・腫物）アリ。経断妊娠シテ未ダ三月ニ及バズ、而シテ漏下（悪露）ヲ得テ止マズ、胎動臍上（おそらく、下の誤りでしょう）ニ在ル者ハ癥瘕妊娠ヲ害ストナス。血止マザル所以ノ者ハ、ソノ癥去ラザルガ故ナリ。当ニソノ癥ヲ下スベシ、桂枝茯苓丸之ヲ主ル」とありまして、妊娠中に漏下（オリモノ）があったことで桂枝茯苓丸を与える意味になりますが、実際には慢性の病気に幅広く使えるわけですね。

方輿輓には「此方、産前ニオイテハ生ヲ催シ、生後（産後）ニアリテハ悪露停滞、心腹疼痛或ハ発熱増寒ヲナス者ヲ治ス」とあって「又、死胎ヲ出シ、胞衣ヲ下ス。胎前産後諸雑症ニ功效ツブサニ述ブベカラズ」と、いろんな雑病に使い、効果のあることを言っております。さらに「経水通ゼズ、通ズルモマタ寡（すくな）ク、或ハ前（すす）ミ、或ハ後（おく）レ、或ハ一月兩至(1ヶ月に2回)、兩月一至(2カ月に1回)等・・要するに月経異常です・・蓄洩常ヲ失スル者、皆用イテ効アラザルコトナシ。」とあって、便秘すると大黄を加え、丸でなくて水煎でもいいとしています。そして「如（も）シ積結久癥（何か塊ができ、久しくたまっている。子宮筋腫や卵巣嚢腫）トナッテハ、此方ノ主ルトコロニアラザルナリ」として、大きくなったものに桂枝茯苓丸を与えても効果はないと思いますが、筋腫も小さい場合には一定効果があるという報告があります。また、卵巣嚢腫の方にも、治りやすいという意見もあります。私は、筋腫には桂枝茯苓丸よりも加味逍遥散を使うことの方が多いです。

方函口訣には「此方ハ瘀血ヨリ来ル癥瘕（ちょうか）（血塞・血塊等）ヲ去ルガ主意（目的）ニテ、オヨソ瘀血ヨリ生ズル諸症ニ活用スベシ。原南陽ハ甘草・大黄ヲ加エテ腸癰ヲ治スト言ウ。余ガ門ニテハ大黄・附子ヲ加エテ血分腫及ビ産

後ノ水気ヲ治スルナリ。又、此方ト桃核承気湯ノ別ハ、桃承（桃核承気湯）ニ狂ノ如ク少腹急結アリ、此方ハソノ癥去ラザル故ナリヲ目的トス。又、温経湯ノ如ク上熱下寒ノ候ナシ」とあります。そうですね、温経湯は陰証ですから、明白に区別が付きますが、桂枝茯苓丸は「陽明、少陽病位の瘀血」ということでかなり広く使えます。ただ、この「瘀血」という概念は非常に幅広く最近では使われてきまして、特に近代西洋医学で微小循環の概念がかなり解明されるなかで、瘀血は微小循環障害だとも言われます。確かにそうですが、桃核承気湯あるいは桂枝茯苓丸・四物湯その他駆瘀血剤と呼ばれている処方が、傷寒・金匱要略ではどう瘀血を表現されているか？ちょっと解説しましょう。

「瘀」は「」+音符「於」つまり、つかえて止まるの会意形声文字ですから、「瘀血」は、いわゆる「古い血」という意味よりも「滞った血」「つかえて留まる血」という意味になります。傷寒・金匱要略の条文では、「太陽病六七日、表証仍オアリ、脈微ニシテ沈、反ツテ結胸セズ、ソノ人狂ヲ発スル者ハ、熱下焦ニアルヲ以テ小腹マサニ鞭満スベシ。小便自利スル者ハ血ヲ下セバ愈ユ。然ルユエンノ者ハ太陽経ニ從イ、瘀血裏ニアルヲ以テノ故ナリ。抵当之ヲ主ル」とあって、小腹鞭満という症候から瘀血証を解説されています。

「陽明病、ソノ人シバシバ忘スル（モノ忘れする）者ハ必ず畜血アリ-広い意味で畜血も瘀血です。然ルユエンノ者ハ、モト久シク瘀血アルガユエニシバシバ忘セシム。屎鞭シトイエドモ大便反ツテヤスシ（便は固いが、出ないんではない。出やすい。ソノ色ハ必ず黒シ（出血か胆汁分泌異常でしょうか？）抵当湯デ以テ下スニヨロシ」とあります。

また、「病人、表裏ノ証ナク、発熱スルコト七八日ナルハ、脈浮数ノ者トイエドモ之ヲ下スベシ」・・・要するに表証がない場合は、脈が浮・数でも下したらよろしい。「外エステニ下シ、脈数解セズ、合熱ヲ発スルトキハ、則チ消穀善饑ス（いくらでも食べる）、六七日ニ至リテ大便セザル者ハ瘀血アリ」として、陽明病的な症候としての瘀血概念が出ています。これも抵当湯によろしとなっています。「若シ脈数解セズ、而シテ下止マザレバ必ず協熱便膿血ス」と表現され、協熱便は裏に寒があって表に熱があることです。

「婦人年五十バカリ、下血ヲ病ミ数十日下マズ、暮レナバ発熱シ、小腹裏急、腹満、手掌煩熱、唇口乾燥スルハ何ゾヤ。此ノ病、帯下ニ属ス（婦人病）何ヲ以テ故カ。カツテ半産ヲ経テ瘀血小腹ニアリテ去ラズ、何ヲ以テカ之ヲ知ルカ。ソノ証唇口乾燥ス。故ニ之ヲ知ル。当ニ温経湯之ヲ主ル。」とあります。

また「病人胸満、唇萎エ舌青ク、口乾キ、タダ水ニテ嗽ガンコトヲ欲スルモ嘔  
(の)ムコトヲ欲セズ、寒熱ナク、脈微大ニジテ来ルコト遅シ。腹満セザルニ、  
ソノ人、我レ満スルト言ウハ疾血アリトナス」とあって、腹満していないのに  
「腹満する」というのは瘀血があるということで、四物湯証の場合、決して客観  
的に腹部が張ってないのに「おなか張って苦しい・困る」と言うのは、やはり瘀  
血の証と解釈していいわけです。

「病者、熱状ノ如ク煩満シ、口乾燥シテ渴シ、ソノ脈反ツテ熱ナシ。之ヲ陰伏  
トナス。コレ瘀血ナリ。当ニコレヲ下ス。」というのもあります。以上の条文・  
というか、これだけしか瘀血の条文は傷寒・金匱要略にないわけです。だから、  
現在一般に言われる桃核承気湯の瘀血証、あるいは桂枝茯苓丸の瘀血概念とは、  
少し違いがあるようです。歴史の流れの中で「瘀血」の概念が少しずつ変わって  
きたようで、これについてはなかなかわからない点がありますので、私もこれか  
ら勉強していきたいと思います。

エキス剤としての瘀血剤ですが、まず大黄牡丹皮湯 (33)があります。これは  
「臍下ニ結毒アリ、圧痛少腹腫痞、有熱性炎症」が推定されるわけです。「大黃  
牡丹皮湯＝虫垂炎初期の薬方」ととらえられています。が、実際はそうでなく、桃  
核承気湯と並び称せられる駆瘀血剤です。桃核承気湯(61)は、少腹急結 (S 状結  
腸に一定の圧痛)と気の上衝です。「狂の如く」と言われ、ノボセが強いこと。  
これが大きな目標になります。この目標のない人に桃核承気湯は適応しません。

それから、桃核承気湯と同じような病位の薬方に通導散(105)があります。こ  
れは傷寒・金匱要略ではなく、森道一貫堂医学で繁用されている薬方です。これ  
には上衝もありますが、腹部全般といいますか、まあ、瘀血となると臍下の抵  
抗・圧痛が一般に強調されますが、通導散は防風通聖散のようにへソ中心に膨満  
する所見ではありません。臍上にかけて膨満感があります。これは患者さんの訴  
えだけでなく、触疹上も認められます。

そして桂枝茯苓丸ですが、有名な所見が臍下の抵抗です。ただ、これも桂皮が  
入っていますので、気の上衝があっただけいいのですが、桃核承気湯と較べると弱い  
です。

温経湯 (106)は、条文にありますように唇口の乾燥、下腹部の冷感・・・これは  
病人さんが冷えを訴えることと別に、訴えはないが、触診すると非常に冷えの強  
い人があり、そういう場合に使います。ほかに手掌の煩熱があってもいいのです  
が、脈証では力がないことです。

四物湯（71）は、腹部が軟弱で抵抗なく、舌証では血虚、つまり貧血ではありませんが、貧血を疑うような所見があります。

当帰芍薬散（23）は、四物湯と似ていますが、地黄がなく、あと利尿剤の茯苓・沢瀉といった薬草が入っており、水毒的、何となしに浮腫傾向が出てきます。当帰四逆加呉茱萸生姜湯（38）は手足の冷えが目標です。冷えは、手足厥冷つまり芯からの冷えの場合は附子の証になります。当帰四逆加呉茱萸生姜湯の場合の冷えは、厥冷でなく厥寒ですから表だけの冷えで、裏（深く・芯）まで冷えているわけではありませんので、これは附子を使わない冷えです。そして下腹部の痛みが長く続けば嘔吐・下痢の証があってもよく、その場合は呉茱萸、生姜を加えます。

以上で大まかに瘀血の話が終わらせていただきます。